



図書館だより



全国図書館大会・法律図書館連絡会総会 参加報告

全国図書館大会

2006年10月26日・27日の両日、岡山市で開催された第92回全国図書館大会に出席しました。主催は日本図書館協会と岡山県。日本図書館協会は図書館の全国組織で当館も会員になっています。当館の加盟している組織には、他に専門図書館協議会（企業・団体の図書館が多い）、法律図書館連絡会（大学法学部の図書館等が多い）があります。

大会当日の参加者は約2000名（事前登録1630名）で、第1日が全体会議、第2日の分科会は、①公共図書館、②大学・短大・高専図書館、③学校図書館、④児童・青少年サービス、⑤専門図書館、⑥障害者サービス・多文化サービス、⑦図書館の自由、⑧著作権、⑨資料保存、⑩図書館学教育、⑪図書館と出版流通の11分科会、及びボランティアの集いが開かれました。

私の出席した専門図書館分科会では、各図書館が独自にどのような目録・索引・データベースを作成したかについて、5つの報告がありました。(1)は、専門図書館協議会から「専門情報機関総覧」編集の経験と苦心。たとえば昭和20年代の教科書が見たい場合、この本のキーワード・索引から「東京書籍株式会社附設教科書図書館」にあることが分かります。この総覧は当館にもあり、レファ

レンスの強力な武器になります。(2)は、銀行図書館の「銀行変遷史データベース」構築。昔の千代田銀行、帝国銀行は今のどの銀行かに答えられます。明治34年には全国で2358の銀行があり、明治以降現在までのすべての変遷をデータベース化するのは時間的にも労力的にも大変な作業です。(3)は機械工業図書館の「企業名変遷要覧」。(4)は大阪建築士会のホームページによる情報発信。(5)は瀬戸内海沿岸地域データベース。いずれの報告も興味深く聞きました。

初日の全体会議では、企業・自治体の財政難のため多くの専門図書館・公共図書館の予算が削減されていることが問題とされました。幸い当館は両会の理事者・会員のご理解により予算面では保障されています。しかし、分科会の報告を聞くと、銀行図書館、機械工業図書館のような小規模の図書館が、独自のデータベースを構築していることは驚きでした。閲覧・貸出の件数が少なく時間的余裕があるにしても経験年数の長いベテラン司書の技能の高さが窺われました。

優秀な司書を養成するには、10年の時間を要するといわれています。両会共に数年ごとに職員の異動を前提としている状況下で、どのようにして図書館職員の専門性を高めるかが、当館の現在最大の課題であり悩みとなっています。

（東弁・二弁合同図書館館長 谷村 正太郎）

法律図書館連絡会総会

第49回法律図書館連絡会総会は、2006年10月27日、文京区本郷の東京大学で開催された。法律図書館連絡会（法図連）とは、加盟館の連携協同を図るとともに、法律分野の図書館技術の向上による、法律図書館としての機能の充実発展を目的とする団体で、当館は1978年に加盟している。

午前中は「法科大学院時代の法学部図書館」というテーマで、大村敦志東大教授の記念講演が行なわれた。大学間で図書の共同利用をしているフランスの大学図書館の報告を交えながら、これからの法学部図書館のあり方について意見が述べられた。

当日は、附属図書館・ロースクール棟の見学会もあっ

た。特に当館でも類縁機関として紹介をしている外国法文献センターは、法令・判例等の資料が非常に充実しており、週3回レファレンスを助手の方が受けてくれるとのことだった。

午後は総会が行なわれ、幹事会・各委員会報告があり、知的財産研究所図書館の加入を承認。総会終了後は「法図連の課題と求められる活動について」のパネルディスカッションが行なわれた。“法律図書館に働く者に求められるものとは”といった視点で様々な意見交換があった。印象的だったのは、図書館が多く情報を持っていても、情報に人（利用者）が寄ってくるわけではなく、情報を持っている人（司書）に利用者は寄ってくるということ。今回、合同図書館のスタッフとして初めて参加したが、広い意味での自分の現場での職務を考えさせられたような気がする。

（東弁・二弁合同図書館事務局 古谷 言子）